四

九つの刻限、二丁櫓の二艘の船に分乗した岩田屋善兵衛一統は、紫川河口を出た。

一艘には黒崎の親分から借り受けた博徒たちが荒縄の襷をかけ、長脇差を腰にぶち込み、竹槍をてに持っていた。

いま一艘には、善兵衛に番頭の新八、牛太郎の磯松、村上鉄蔵に坂崎磐音、伊藤主膳、名古屋八五郎、多田権之丞、磯貝武助の九人が乗り込んだ。

松明を掲げた二丁櫓は潮の流れに乗るように馬関海峡へと入っていった。

「先程は助かりました」

磐音と伊藤は舳先の近くに並んで座っていた。

河口に立って見送るおまつの影を見ていた磐音の死選が伊藤に移動した。

「坂崎さんが岩田屋に加わったのは、謂れがあってのことのようですな」

伊藤は声を潜めた。

風は艫から舳先に、追い風が吹いていた。

「それがし、岩田が長崎から連れてきた遊女に関わりがありましてね」

やっぱりと伊藤が頷き、

「もし助け出したいのなら、出入りの騒ぎに連れて逃げなさい。それがしも手助けしますでな」

と言い足した。

磐音はただ頷いた。

向か上の憎しみのこもった視線が磐音を見ていた。が、当の磐音は素知らぬ顔だ。

船の左側に黒い島影が見えてきた。

「彦島です。ほれ、こちらの行く手に小さな島影が見えてきましたな。あれが、佐々木巌流どのが宮本武蔵に討ち果たされた船島、ここいらの者は巌流島と呼んでおる島です」

磐音は思いがけなくも、慶長十七年四月十三日に戦われた宮本武蔵と佐々木小次郎との決闘の場を間近で見ることになった。

磐音は近付く小島に目を凝らしていたが、潮の流れが変わったか、船足が急に落ちた。

「なんばしちょっとか、夜が明けるばい」

善兵衛が苛立った声を上げた。

「岩田屋の旦那、早鞆瀬戸ば乗り切るとですばい。ともかくたい、夜明け前に赤間関につきゃよかろうもん」

船頭が櫓を操りながら閉園と答えた。

本州と九州を分かつ馬関海峡は、早鞆瀬戸とも呼ばれ、一日に四度潮の流れが変わるという。

この海峡で寿永四年三月二十四日、源平最後の決戦が行われ、哀れ平家は壇ノ浦に沈んだのだ。

「新八、眠り込んだ唐太夫の脳天ば一撃んもとに叩き割るばい」

善兵衛らは、徳利の酒を回し飲みして景気をつけていた。

「坂崎さん、赤間の遊里がなんで賑わうか知っておられるか」

「さて、それがし、そちら方面は疎うござる」

「壇ノ浦で滅亡した平家一門の女官たちが赤間の湊の遊女に身を落としたそうでな、水夫どもが赤間の稲荷町の遊女を尊ぶ謂れだ。赤間神宮では、海に沈んだ安徳天皇を祀る行事が毎年五月に催されてな、遊女に身を落とした女官がお参りしたのがその起源とされておる」

「よくご存じだ」

耳学問ですと苦笑いした伊藤が、

「坂崎さんに縁のあるお方が元気ならばよいがな」

と心配した。

「此処は北国西国の廻船の津にして日ごと入船出船数をしらず、誠に西国第一の大湊なり」

と尾張の商人の書き残した紀行にあるように、赤間の湊に無数の大小の船が潮待ち風で帆を休めていた。

二艘の二丁櫓の船頭は、見事に潮の流れを読みきって稲荷町そばの船着場に船を着けた。夜明けにはまだだいぶ刻限がありそうだ。

「よかな、遊女を傷つけちゃいかんばい。そん代わりたい、赤間の唐太夫の首ばころりんと落としない。そん者にはたい、十両の褒賞ば、こん善兵衛が上げますばい」

善兵衛が一統を鼓舞した。

船から一統が陸へと飛び上がった。

磐音が船べりに足をかけたとき、伊藤主膳が磐音の袖を摑んだ。

「坂崎さん、化け物があんたを狙っておる。いいですね、出入りはどうでもよい。目当てのお方を探したら、さっさと退散されるのじゃ」

「分かりました」

二人は同時に赤間の湊に飛び上がった。

緋の袴　流れ流れて　　　下関

下げ髪を　　流れにひたす　　下関

平家の女官が遊女の発祥という赤間の稲荷町の遊郭は、深い眠りに就いていた。

赤間の唐太夫が妓楼主の小袖屋は、間口が十数間はありそうな大楼だ。だが、岩田善兵衛が先頭で案内したのは、小袖屋と地所続きながら裏手の赤間の唐太夫一家の表口だ。

「磯松、構うことはなか、戸ば叩き破んない」

掛矢を背負っていた牛太郎の磯松に善兵衛が命じ、

「村上の旦那、坂崎さん、どっちでもよかたい、唐太夫の素っ首ばあげたほうに褒美ばやるばい。しっかり働きない」

と鼓舞した。

この夜の善兵衛は、着物の裾を絡げて帯に巻き込み、襷がけに鉢巻姿、すでに抜き身の長脇差を構えていた。

「よし、新参のそれがしが先陣を務めよう」

磐音が自ら志願すると、磯松が潜戸に一撃目を叩き込んだ。

どんどーん！

通用口は数撃で破れ飛んだ。

磐音は土間に飛び込むとかたわらの暗がりにしゃがみこんだ。あとから村上鉄蔵らが傾れ込む。

「唐太夫、出てこんね。おまえの小汚れなか首ば叩き落としちゃるけんね！」

「小倉の岩田の討ち入りやぞ」

磐音と村上が飛び込んだことに勢いづいた善兵衛や新八たちが、板の間から奥座敷へと走りこんだ。

「わあっ、出入りごつある！」

「得物はどこね！」

慌て騒ぐ声が奥に響いた。

磐音はその声を背に聞くと外に飛び出て、小袖屋に戻った。小袖屋の裏手には赤間の唐太夫の庭まで高い板塀が建て回されていた。

磐音は天水桶を積んだ防火用水の樽を足がかりに塀を乗り越えた。

唐太夫の敷地との間にも塀が建てられ、潜りとが見えた。

磐音は勝手口の戸の隙間に脇差の切っ先を突っ込んで持ち上げ、心張り棒を外した。台所に入ると常夜灯のかすかな明かりに二階へ上がる裏階段がほの見えた。

磐音は脇差を鞘に戻し、草履を脱ぐと懐に入れて、二階へ上がっていった。踊り場を鉤の手に曲がると廊下がまっすぐに表口へと伸びて、左右の部屋から鼾や寝息が聞こえてきた。

（奈緒はどこにいるのか）

磐音は足音を忍ばせて廊下を表に向かって進んだ。廊下が大階段にぶつかり、そこが六畳ほどの板の間の踊り場になっていた。

明かりが踊り場の奥の廊下から洩れてきた。

（たれか起きている者がいた）

磐音は明かりを頼りに進んだ。

「どなたはんですっ」

京訛りの女の家が障子の向こうから聞こえた。

磐音は廊下に片膝をついた。

「相済まぬ。ちとものを訊ねたい」

部屋の中でしばらく沈黙があった。意を決したように動く気配がして障子が開けられた。

「お客さんどすか」

「いや、そうではない」

諦観にも似た落ち着きと艶の漂う美貌は若くはなかった。挙動に太夫の貫禄が備わっていた。

「お入りやす」

「すまぬ」

「裏手がえろう騒がしゅうおすが、お仲間だすか」

「仲間ではないが一緒に参った」

「御用はなんだすのん」

「小倉の岩田善兵衛方から素人が連れてこられたはずだが、どこに寝ておるか知りたい」

「奈緒様のこと」

さよう、と答えながら磐音はついに奈緒と同じ屋根の下にいるのだと胸が騒いだ。

「そなた様はどなたはんだす」

「坂崎磐音と申す、奈緒どのの許婚にござる」

女の細い瞼が見開かれた。

「豊後から長崎、小倉と奈緒どのの後をおって参った」

「あんさん、奈緒様と足抜けをしはる気だすか」

「いや、ここに百四十両ばかり用意してきた。足らぬところは、後日、なんとでもいたす所存、楼主どのと話し合いをいたす」

遊女が声もなく笑った。

「裏手の討ち入りは、岩田はんの一家だすか」

「さよう」

「出入りに加わっておきながら、楼主と遊女の身請けの掛け合いをなさる気だしたんか」

それは、と磐音が言葉を詰まらせた。

小袖屋にも裏の騒ぎが伝わってきたか、階下で男衆が起き出した様子だ。

「一足違いにござりました」

「一足違いとは……」

「岩田屋から連れてこられた遊女衆の中でただ一人、昨日の夜明けに帆を揚げた船に奈緒様は乗せられましたんどす」

「確かなことか」

「旦那は、赤間関で稼がせるよりは、京の島原に転売したのんが利が早いと考えはったんだす」

磐音の方の力ががくりと抜けた。

「なんということか」

階段を駆け上がってくる音がした。

「隣の部屋にお隠れやす」

磐音は夜具が敷かれた部屋に飛び込むと襖の陰に身を潜めた。

「太夫、怪しい野郎が潜んだちゅうこつはありまっせんか」

「亀蔵さん、こんな夜中にだれが来ますんえ」

障子が開けられ、部屋を見回している様子だ。

「裏手がせわしゅうおすが、なんやあったんやろか」

「小倉から岩田やが乗り込んだけな、部屋にじっとしとかんね」

障子が閉められた。

しばらくして襖の陰から磐音が訊いた。

「太夫、奈緒どのは京にいくらで売られたのであろうか」

「番頭はんが一人付いていかはった。値は京で決まります」

「……」

「楼主様は、五百両は堅いとみておられまんや」

磐音は襖の陰から出た。

「島原遊郭のどこを訪れば、奈緒どのに会えよう」

「わてがおりました朝霧楼と思います」

「迷惑をかけたな」

襖から太夫のいる座敷に戻った。

太夫が一本の白扇を出した。そこには、波打ち際に押し寄せる波と戯れる七歳ほどの娘と前髪たちの若者が描かれていた。

奈緒と磐音だ。

弧状に延びる関前湾の砂浜と松林の上に白い夏雲が広がり、画面の中央に白鶴城と謳われた関前城の天守が描かれていた。

夏雲に　問うや男の　面影を

十五、六の年、磐音の一家は、関前湾をはさんで対岸の岬にある西行山泰然寺に墓参りに行った。磐音の母親の実家岩谷家の菩提寺だ。その折り、兄の琴平と奈緒が同行した。

その帰路、松林を抜けて城下に戻った。

奈緒が波打際に走り出し、磐音が追いかけていったことがあった。

そのとき、奈緒は波に翻弄される小さな蟹を無心に見詰めていた。

「そなたはんに差し上げまひょ」

「かたじけない。そなたの名はなんと申される」

「赤間では薄霧と呼ばれております」

磐音は薄霧太夫に深々と頭を下げると、奈緒の水茎の跡がくっきりと残された白扇を受け取った。

これで二本になった。

「そなたはんの運をな、赤間神社の帝にお祈りいたします」

磐音が廊下に出ようとすると薄霧太夫が、

「おまえ様なれば妓楼の二階の庇から表に飛び降りられましょう」

と表通りに面した障子戸を静かに開けた。

「さらばでござる」

庇に出た磐音は小袖屋の端まで進むと隣家との間の路地に飛び降りた。

「烏合の衆やぞ、押し包んで殺せ殺せ！」

赤間の唐太夫一家がせめ攻勢に出たか、そんな叫び声が響いてきた。

磐音は、見知らぬ町でただ一つ知っている湊への道に戻ろうと路地を出かかった。するとそこに六尺を優に越えた巨大な陰が行く手を塞いだ。

「怪しい奴だと思うておった」

野太刀一刀流の村上鉄蔵が、血に濡れた刃渡り三尺を超える大太刀を下げて待ち受けていた。

「そなたとそれがしが戦う理由もないと思うがな」

「村上鉄蔵賀雲、これまで小馬鹿にされた覚えなし」

村上が野太刀を八双にとった。

磐音は包平を抜くと正眼に構えた。

赤間の唐太夫一家の出入りは、屋内から屋外へと闘争の場が移ったようで、騒ぎ声が夜空に響いた。

だが、小袖屋をはさんで反対の路地では、静寂の戦いが進行していた。

重く静かに戦いの機運が熟してきて、村上鉄蔵の野太刀がぴくぴくと天を突いた。

それが幾度か繰り返され、小山が傾れ崩れるように村上鉄蔵が走った。

磐音も腰を沈めて走った。

居眠り剣法と評される受けの剣を、この夜の磐音は捨てていた。

時間が長引けば、唐太夫との闘争に巻き込まれる。

そのことが磐音を一撃一閃の戦いへと駆り立てていた。

また村上も一撃の据物斬りに汚名返上を託していた。

天が落ちる勢いで村上の野太刀が振り下ろされ、

ぶうーん

という人刃風が辺りに響いた。

磐音は、腰を沈めたまま地面にへばりつくように走りながら刃下を潜り抜け、野太刀の軌跡に擦り合わせるように斬りこんだ。

思い切った踏み込みが一瞬の差を生んだ。

包平が野太刀を握った村上鉄蔵の右手首を斬り付け

うっ

という呻きを村上が発した。

立ち竦んだ村上鉄蔵の両眼に怯えが走り、顔が歪み崩れた。

磐音は村上の傍らをすり抜けて反転した。すると村上も剣術家の本能で上体を磐音のほうに捻った。さらに左手一本に野太刀を構え直して、相撃ちの覚悟を見せた。

もはや斃すか、斃されるしか途はない。

磐音は腰を沈めつつ、野太刀に身をぶつけるように走り、包平を振るった。

地面から鮎のように躍り上がった包平が村上の首筋を、

しゃっ

と撫で斬った。

血飛沫が路地の暗がりに散って、巨木が朽ちるように倒れ込んだ。

磐音は、表通りに走り出た。すると小袖屋の二階から薄霧太夫が白い顔を覗かせ、どこか寂しげな笑みを浮かべた。

「岩田屋善兵衛を返り討ちに仕留めたばい！」

路地から鯨波が上がった。

（伊藤主膳はどうしたか）

元豊後関前藩士を騙って世渡りする伊藤なら、戦いも加わらずなんとか逃げ延びていようと考えながら、磐音はただ闇雲に湊に向かって走っていった。